

九月のテーマ

されど挨拶



え・城谷俊也

人・物・自然への真心が 形となって表われる

倫

理法人会では、様々な場面で挨拶の大切さを説いてい

ます。それはどのような挨拶なのでしょう。倫理運動を創始した丸山敏雄のエピソードから学んでみましょう。

昭和二十四年十月、九州の大牟田から上京した山口救^{もとあ}氏は、倫理の会合に出席した後、帰りの電車で丸山敏雄の隣に座りました。そこで驚きの光景を目の当たりにしたのです。先に電車を降りる会友に対して、席を立ち、挨拶をする丸山敏雄の姿でした。

「今日は、大変ご苦労でしたね。本当にご苦労さまでした。ゆっくりお休みになってください」と声をかけ、電車が発車しても、ドアのところ立って、ホームが見えなくなるまで手を振って見送りしました。こうした光景が、駅に着くたびに繰り返されたのです。

この姿に、山口氏はいたく感銘を受けたといいます。「同じような（挨拶の）言葉は聞かぬが、先生の挨拶は普通ではない。どこからあのような言葉が出てくるのか。平生

どんなふうにしていればああいう態度ができるのか。そう自省し、その後は、自身が真心からの挨拶に励んだといいます。

続いては、人以外の事例です。挨拶は通常、人と人との間で行なうものですが、私たちが学ぶ純粋倫理では、その対象に、人以外の物や自然を含んでいます。

車の運転をする際「よろしくお願ひします」と礼をしたり、工場の機械を磨きながら「お疲れさま」と労う、などといった動作や言葉も挨拶であるといえるでしょう。

丸山敏雄は、「水」を大切にしました。「この美しい水を飲み、水に養われて大きくなった物を食べ、水に育まれた大自然の中に、水とともに生きている」喜びを思い、水を粗末にせぬことを著作の中で述べています（『清き耳』より）。

朝の洗面では、井戸（水道の蛇口）に向かって、「この清水^{せいすい}をちょうだいいたします」と一礼してから、水を洗面器に汲み入れました。そして目、眉、耳、口、鼻の中まで一つひとつ洗面をしました。それ

は単に顔を清潔にするためだけではなく、心の垢を落とすつもりで丁寧に行なったといいます。

洗面器に残った水は、草木にかけ、玄関の土間や乾ききった道に撒きました。そして、その心のまま太陽を礼拝するのが、丸山敏雄の朝の習慣でした。

*

私たちは、多くの人、たくさん物、生命を育む自然との結びつきの中で暮らしています。もしもそれらと関係が持てない場所で生活するとしたら、生きていくことそのものが難しいでしょう。

このことを思う時、そこに（人、物、自然があつての我が命である）という自覚、（ありがたい）という感謝の気持ち湧いてきます。その心が自分以外に向けられる時、「お辞儀をする」「礼を尽くす」「声をかける」といった動作や言葉となって、形に表われるのでしよう。真心から相手を思う挨拶、物や自然への挨拶の実践に取り組んでみませんか。自身を変えるきっかけになるはずですよ。